研究ノート

現代南仏丘上集落の「ルネッサンス」

——バスプロバンスのセヨンの例——

滝波章弘

はじめに

地中海沿岸地方では、ヨーロッパ、アフリカ、アジアを問わず、丘や岩の上に立地する集落をしばしば目にする。今日のフランスではこうした集落を、研究者、専門家やある程度の知識のある一般の人々は village perché と呼んでいる。本稿ではこれを丘上集落と訳したい。[1] リベ（LIVET, R.）の定義によれば「傾斜が急でかつ周囲の地形とは比較的に切り離されたような傾斜地の高いところに立地する」[2]集落ということになるが、実際地中海沿岸地方でも、どの集落までを丘上集落とみなすかは曖昧なところも少なくない。にもかかわらず、現実には遠目に見て、小高い丘や岩の上に家屋を鷹の巣のように寄り合わせてつくる集落はほとんど丘上集落とされているように思われる。[3] バスプロバンス地方やコートダジュール地方で現在丘上集落と呼ばれる集落は、直接的には十一、十二世紀にカストロム（castrum）の名で史料に現れる。当時争乱の時代であり、防衛の必要性から人々が領主の城館を中心に丘上に城塞集落をつくったのが最初だと一般には信じられている。[4] ただ、近年は丘上集落の起源に関して、紀元前三、四世紀頃を中心に発達したリギュール（Ligure）人の丘上城塞集落オピドム（oppidum）との関連が示されており、[5] 丘上集落は単なる中世争乱期の産物というよりは地中海文明の表現であるという考え方が中心である。

ところでこのような丘上集落は歴史的には早くも十三、十四世紀には衰退を始める。すなわち、人々は丘上の集落を放棄し、丘

陵斜面地の下部に新しく集落をつくったり（降下現象 déperche-ment）、丘上集落が集落分化を起こし、丘上集落と低地や丘陵斜面下部に分化した新しい集落との併存状態（分化現象 dédouble-ment）を示すようになるのである。こうした丘上集落衰退の現象は近代という新しい時代に入り、平地での経済、産業や交通の発達に対応できない丘上という立地場所の生活上、アクセス上の不便さ、利用できる空間の少なさにあったとされる⑥。衰退はフランス革命を経て領主のいなくなった、単なる農村としての丘上集落にも続き、十九世紀後半の有名な害虫フィロキセラによる葡萄の大被害などもあり、過疎化を被る農村という事態に至る。二十世紀前半もこの状況に変わりはなかった⑦。ところが二十世紀も後半に入って、丘上集落は「ルネッサンス⑧」や「若返った⑨」という表現にみられるようによみがえったのである。確かに人口は増加に転じ、地中海地方独特の集落景観は残された。本稿ではこれを「ルネッサンス」と呼び、その現象について一つの集落を事例として説明する。

① 訳語は次の文献による。谷岡武雄、「フランス地中海岸域における農村集落」、『立命館文学』、一九〇号、一九六一、二五二頁。

② LIVET, Roger, —《Recherches sur les villages perchés de la France méridionale》, in FLATRÈS, Pierre, PLANHOL, Xavier de, *Études sur l'habitat perché*, Publications du Département de Géographie de l'Université Paris-Sorbonne n°11, 1983, pp. 11–12. LIVET は具体的に尖形岩 (piton rocheux)、孤立残丘 (butte témoin)、山脚 (éperon)、台地外縁 (rebord de plateau) などの地形上に丘上集落は立地すると言う。

③ DEMANDEON, Alber,—《Types de peuplement rural en France》, *Annales de Géographie*, 48e année, n°271, 1939, pp. 10–17./LIVET, Roger, —*Atlas et géographie de Provence Côte d'Azur et Corse*, Flammarion, 1978, pp. 61–66, pl. 20 など随所参照。

④ 本当のところ丘上集落成立の理由は解明されていず、諸説あるが、実際には防衛説以上の確固とした仮説を出すことは難しいようである。

⑤ DÉMIANS D'ARCHIMBAUD, Gabrielle, — *Les fouilles de Rougiers (Var) : contribution à l'archéologie de l'habitat rural médiéval en pays méditerranéen*, C.N.R.S., 1980, pp. 87–88. / BRUN Jean-Pierre et al., —《L'habitat rural dans le Var à l'époque romaine : données archéologiques récentes》, *Provence historique*, tome 35, fasc. 141, 1985, p. 246. / DÉSIRAT, Guy, —《L'oppidum de Bayonne (Bagnols-en-Forêt)》, *Provence historique*, tome 35, fasc. 141, 1985, p. 256.

⑥ LIVET, Roger,—*L'habitat rural et structures agraires en Basse-Provence*, Thèse de doctorat d'État, Ophrys, 1962, pp. 201–206, pp. 215–217. / BOUZAT, D., —《Le bassin de Cuge, contraction de terroir et dislocation du village perché》, *Méditerranée*, n°1, 1969, pp. 86–92. / CHARRE, Jean-Pierre,—《L'habitat et la mise en place du peuplement dans la vallée moyenne de la Durance》, *Bulletin de la société d'études des Hautes-Alpes*, 1969, pp. 83–107.

⑦ GEORGE, Pierre,—《Le Tricastin》, *Annales de Géographie*, 39e année, n°222, 1930, pp. 590–591. / LIVET, 1962, op. cit., p. 217.

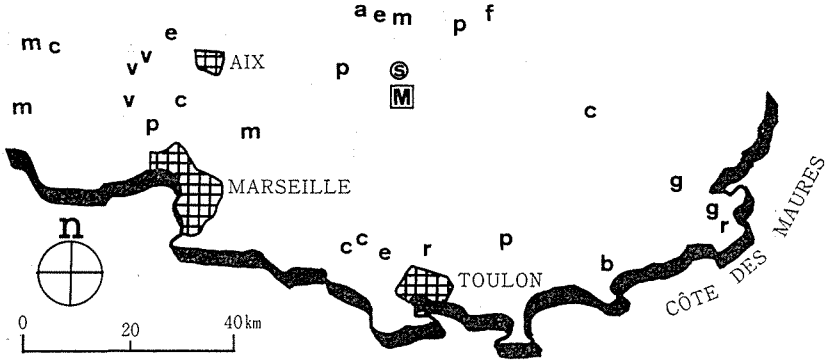
⑧ MENNY, Marie-Hélène, —《Renaissance des villages du Lubéron》*Études vaucluisiennes*, jan.-juin, 1970, pp. 20–25.

⑨ LIVET, 1962, op. cit., pp. 207–208.

《I》 現代丘上集落の問題

現代丘上集落の変容現象の実態報告やその説明に関する研究はすでにいろいろとなされているが、①そこに見られる中心的な枠組みはラーバニゼーション (rurbanisation)②、都市化、あるいは観光化の見られる丘上集落という機能的都市農村関係である。すなわち農業人口の流出と逆方向に中心地から都市居住者が流入し、結果として都市通勤者、退職者、バカンス滞在者、職人、文化人、芸術家などからなる「農村」が出現するのである。しかしここでよく考えてみる必要があろう。丘上集落はその丘上という特異な立地場所ゆえに成立し、またその特異な立地場所ゆえに衰退してきた。したがって当然、二十世紀後半の「ルネッサンス」に関しても、いったい丘上という立地場所はどう見なされ、どう扱われたのか、そしてそこでは何が起こったのかという疑問が生じてこよう。

もちろん丘上の場所やその景観の意味に関する言及がなかったわけではない。このことは確認しておく必要がある。リベは丘上集落の成立要因として防衛の必要性だけでなく、丘上の気候のよさやミストラルからの回避があったのではないかという議論を展開している。③またリベの他に、フォール (FAURE, P.) やブロンベルジェ (BROMBERGER, Ch.) もロスタン (ROSTAING, Ch.) のプロバンスに関する地名の起源研究 (*Essai sur la toponymie de la Provence*, 1950) を引き出し、丘上集落を岩の象徴性や石の文明の中に位置づけている。④さらにフォールは旅行者の目から丘上集落の天に近いイメージまで述べている。⑤そして都市化、観光化される丘上集落を扱った諸研究の中でも丘上集落の眺望のよさ、美しい景観、城壁、石の家、曲がりくねった小道、階段などの中世的形態、地中海的農村景観がしばしば記されている。⑥しかし、このような丘上集落の景観と場所の意味についての言及も何か表面的であるように感じられる。そこで筆者はもう少し丘上集落の中に入って、いったい丘上とはどんな場所なのか、現代丘上集落とはどんな集落なのか、そして、そこに住む新しい人々はどんなふうに丘上集落をとらえているのか、そういった問題を明らかにしたいと考えた。たしかに現代丘上集落の研究はほとんどしつくされており、いまさらという感はある。そしてツーリストやセカンドハウス滞在者が丘上集落の景観や眺望、史跡性に注目したと指摘すれば、それで十分かもしれない。しかしかくもその立地場所ゆえ、衰退の一途をたどっていた丘上集落が現代によみが



アルファベットは各丘上集落名の頭文字を意味する
（ただしSt（聖），vieux（古）などは無視した）
Ⓢはセヨン　Ⓜはサンマクシマン

図1　バスプロバンス地方南部

えったという現象には、やはり丘上という地形上の特異点（site）が現代において新たな意味の場所となってきた過程にまで議論を進める必要があると考えられる。

本稿ではこの丘上という特異点の問題を数値上平均的な丘上集落の形態をもつ⑦、バスプロバンス（Basse-Provence）地方バール（Var）県セヨン（Seillons）⑧の丘上集落で考える（図1、図2、図3参照）。セヨンはマルセイユの東北東約五〇㎞に位置する行政村たるコミュンヌ（commune）であり、他の多くのバスプロバンスの集落と同様、le village（以後、本稿では仮に「村」と訳しておく。）と呼ばれる役場をもつ集村形態の中心的な集落とその周囲に点在するアモ（hameau）と呼ばれるいくつかの小規模な集落や孤立宅から構成される（図4）。この中の村が本論の主題である丘上集落で、石灰岩質の比高一二〇mあまり、標高三八八mの小丘の南斜面上部約二五％に立地する。赤褐色の丸瓦の屋根と薄い褐色の石壁が重なり合う集落は、夜にでも下の街道から見上げれば、青白い中に街燈が灯り近づき難い様相をさえ呈する。現在のコミュンヌ内の土地利用はほとんどが葡萄酒用の葡萄畑であり、その他は森林とガリーグ（garrigue）と呼ばれる灌木の荒地である。景観的には農村で、フラトレ（FRATRÈS, P.）も現代の丘上集落にはいろいろな機能があるという一例としてセヨンを

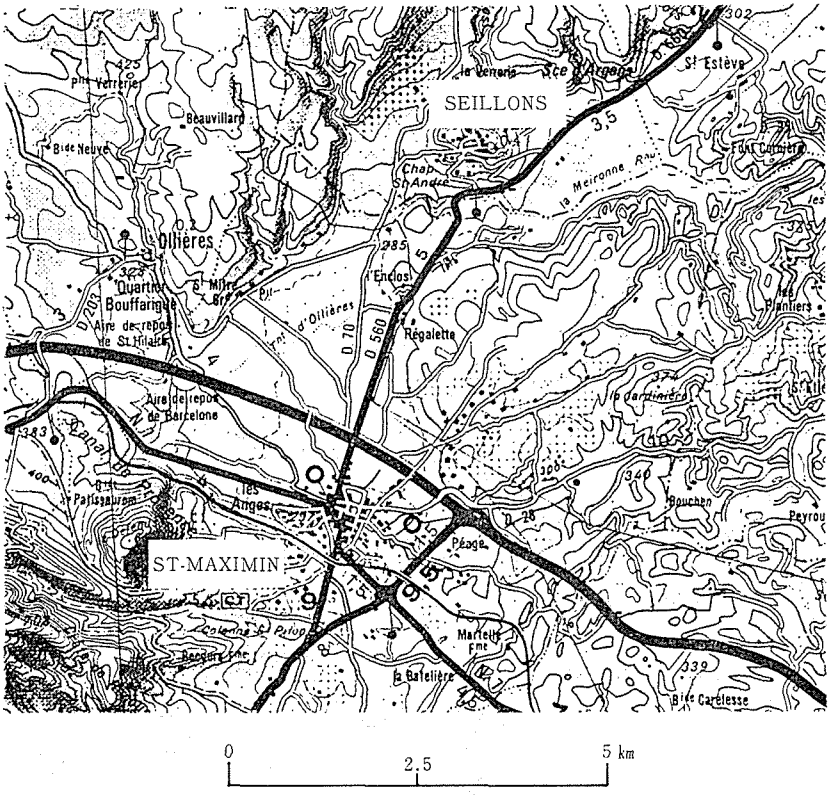


図2　サンマクシマンとセヨン
I. G. N.（国立地理院）1：100000地図 MARSEILLE/CARPENTRAS (1987)

農村に分類しているが、⑨はたしてどうだろうか。筆者はI.N.S.E.E.（国立統計経済研究所）やバール県古文書館所蔵の国勢調査資料の整理、現地での実地観察、住民への聞き取り調査⑩、エリー・フロランス(FLORENS, Élie)という村人の一人が書き残した文書⑪、新旧の地籍図の比較分析を通して、二十世紀のセヨンの丘上集落をとらえたい。

分析に入る前に、簡単に統計資料上の問題についてだけ指摘しておきたい。第二次大戦以前のコミューン関係の統計については、史料としてバール県古文書館で閲覧できる国勢調査時の住民名簿が存在するので、これが利用できる。この名簿には住民の個人データの他、居住地区名が記載されているので、村だけの集計や地区単位の集計も可能であり問題はない。ところが戦後の統計資料については問題が一つある。それは国政調査の結果に関してI.N.S.E.E.が公

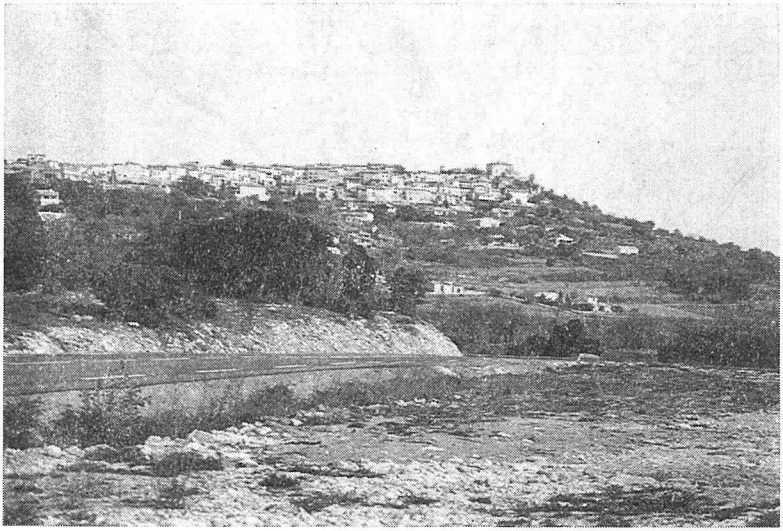
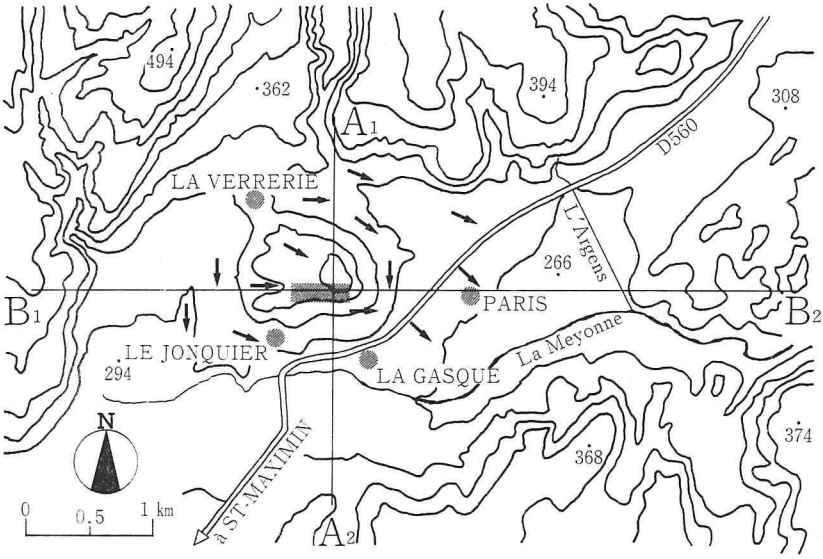


図3　セヨンの丘上集落の景観
（筆者の写真。集落の南方向から撮影。手前は県道 D560。）



▨：丘上集落　◎：アモ　➡：ミストラルの吹く向き　数字は標高
（I.G.N. 1:25000地形図 SAINT-MAXIMIN-LA-SAINTE-BAUME（1988）をもとに筆者作図）

図4　セヨン付近の地形と集落

表1　セヨンの人口と集居率

年	コミュンヌ人口(人)	村の人口(人)	集居率(%)
1851	489	402	82
1861	497	403	81
1871	510	417	82
1886	503	427	85
1891	442	378	86
1901	417	365	88
1911	331	281	85
1921	323	275	85
1931	320	266	83
1946	327	279	85
1954	311	264	85
1962	291	247	85
1968	295	232	79
1975	309	244	79
1982	397	271	68

Archives départementales du Var および I. N. S. E. E. 資料による。

表しているコミュンヌ関係の最も詳細な統計資料である「網羅集計」(dépouillement exhaustif) でさえも、統計がコミュンヌの集計となっていることである。よって村だけの統計や地区ごとの統計は得られない。[12] ただし村の人口だけは役場をもつ集落への集居人口というかたちで公表されており、丘上集落がコミュンヌ人口の何パーセントを占めるかは判明している。[13] セヨンでは幸い、丘上集落への集居率が近年までかなり高く(表1)、国勢調査資料を用いても、聞き取りなどで補足すれば、十分にセヨンの丘上集落の機能変化の跡をたどれよう。

① LIVET, 1962, op. cit., pp. 207-208. / FAIDUTTI-RUDOLPH, A.-M., —《Monfort, sicilliens et kabyles font revivre un village perché》, *Actes du 90e congrès national des sociétés savantes, section de géographie*, Nice, 1965, pp. 119-133. / VIDAL, Christiane, —《Eze-sur-mer ou la mutation d'un village》, *Recherches méditerranéennes* 8, Ophrys, 1969, pp. 293-301. / TIRONE, L., —《Vitrolles, du village à la ville》, *Méditerranée*, tome 8, n°4, 1969, pp. 409-434. / MENNY, op. cit., pp. 20-25. / TIRONE, L., —《Un village provençal à la recherche de sa vocation》, *Méditerranée*, tome 10, n°3, 1971, pp. 649-666. / DAUPHINE, A., —《Carros, un exemple d'aménagement volontaire》, *Méditerranée* n°3-4, 1972, pp. 3-17. / GROSSO, René, —《Le renouveau villageois sur la rive gauche du Rhône entre Drôme et Durance》, *Études rurales*, n°49-50, 1973, pp. 265-295. / Univ. de Provence, —*Campagnes méditerranéennes: permanences et mutations*, C. R. D. P., 1977, pp. 304-306. / MARTINELLI, Bruno, —*Une communauté rurale de Provence face au changement*, C. N. R. S., 1983, pp. 28-43. / FLATRÈS, Pierre —《Les villages perchés》 in FLATRÈS, PLANHOL, op. cit., pp. 8-10. なお BERGOUNHOUX, S., —《Les transformations du genre de vie et de l'habitat rural, commune de Cabrières》, *Bulletin de la section de géographie*, tome 53, 71e congrès des sociétés savantes, Nice, 1938, p. 93 はすでにその当時、丘上集落が農業機能を失い、避暑客の集落に変化していることを報告しているが、他の研究から言えるように、本格的な丘上集落の機能変化はやはり第二次大戦後と言うべきであろう。

② この用語については青木伸好「地域の概念——都市と農村の関係において」、大明堂、一九八五、二八一頁〜三〇六頁)の批判のごと

く、概念でなく実態を指すものとする。

③ LIVET, 1962, op. cit., pp. 210–212.

④ ibid., pp. 219–221. /FAURE, Paul, —《Les villages perchés de Provence》, *L'historien*, n°73, décembre, 1984, pp. 62–72./BROMBERGER, Christian, —《La Provence : une civilisation de la pierre》, *Lithiques*, n°1, 1985, pp. 8–10.

⑤ FAURE, op. cit., p. 72.

⑥ FAIDUTTI-RUDOLPH, op. cit., p. 119. / VIDAL, op. cit., p. 293, p. 300. /TIRONE, 1969, op. cit., p. 418. /MENNY, op. cit., p. 27. /Univ. de Provence, op. cit., p. 36, p. 306.

⑦ 筆者は1：25000地形図を用いた集落形態の定量的な読み取りからバスプロバンスの丘上集落の全体的な特徴として、南／南西斜面立地の方位性、凸型地形を背後に凹型地形を前方にもつ眺望性、傾面の上部平均約二七％に立地する高地性の三点を次の論文の中で明らかにした。慶応大学文学部民族学考古学専攻一九九一年一月提出卒業論文「南フランス低プロバンス地方の丘上集落の成立要因について」（未発表）。

⑧ 正式には同じ県のセヤン（Saillans）との混同をさけて Seillons Source d'Argens であるが、一般にセヨンと呼ばれ、本稿もそう記す。なお、DAUSAT, A., ROSTAING, Ch., —*Dictionnaire des noms de lieux en France*, Larousse, 1963 によれば、セヨンとは高みの意味である。

⑨ FLATRÈS, op. cit., p. 9. なお彼は "Saillons" と記しているが "Seillons" の誤りである。

⑩ 現地調査は一九九〇年の三月の一週間と八月の一週間の二回、計二週間おこなった。

⑪ フロランスの少年時代である二〇世紀初頭から一九六〇年現在までの彼自身の経験やセヨンの歴史、動植物、生活、習慣などについて、タイプで書き残した本形式のもので、そのコピーがバール県古文書館に保管されている（資料番号D二一三）。実際に筆者がこの文書に出会えたのは、古文書館の資料員の指示によるが、セヨンでの調査中にすでにその存在は耳にしており、昔からの住民には知られた文書らしい。三三六頁あり、一九六〇年に書き終えられている。表題は *Monographie de Seillons, mon village du nord-ouest du Var.*

⑫ 現在の住民名簿については完全に閲覧不可能ということではないようだ（Univ. de Provence, op. cit., p. 305 参照）が、筆者は見ることができなかった。

⑬ バスプロバンスでは歴史的な背景から、「丘上集落＝村＝役場のある集村」が一般的である。当地方の集落形態について詳しくはLIVET, 1962, op. cit., pp. 111–264 参照。

《Ⅱ》 二十世紀における丘上集落の変化

（1） 二十世紀初頭の形態的変化

統計資料（表2、この資料についての説明は本章2節に後述。）は二十世紀初頭のセヨンが人口流出を続ける農村であった様子を示している。村、アモともほとんどの住民は農業に従事していた。そして丘上集落への集居率も極めて高かった。これはセヨンにおいては人口減少が続くものの、比較的丘上集落の分化が弱かったことを示す。実際フロランスの記述によれば、丘上集落がコミュンヌ内の中心地機能、すなわち最低次の中心地機能を担っていた

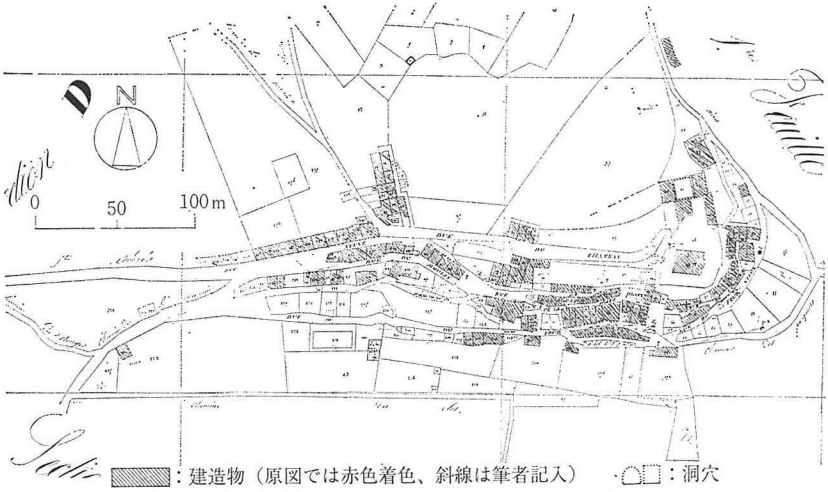
表2　セヨンの社会変化

年	1901	1911	1921	1931	1946	1962	1968	1975
農業世帯数合計	79	69	86	70	79	50	49	32
自作農	74	63	73	62	72	40	32	25
農業賃金労働者	5	6	13	8	7	10	17	7
非農業世帯数合計	17	17	10	21	19	21	21	33
職人	4	8	7	3	1	} 4	} 6	} 4
小売・卸売商人	3	2	0	2	4			
自由業者，管理職	0	0	0	0	0	0	0	3
中間管理職	2	2	2	4	1	2	4	1
雇用労働者	0	0	0	3	2	2	0	6
労務作業者	4	4	1	6	8	10	9	13
使用人	0	1	0	3	3	1	1	4
その他（芸術家，聖職者，警察官等）	4	0	0	0	0	2	1	2
不明	1	1	1	1	1	0	0	0
非就労世帯数合計	25	27	20	21	19	37	36	56
引退農民	0	0	0	0	1	19	?	27
農業以外の退職者	1	0	4	8	2	10	?	24
その他の非就労者や学生など	?	?	?	?	?	8	?	5
セカンドハウス数	?	?	?	?	16	46	51	104

セヨンの世帯代表者の社会職業分類と家屋（本宅／セカンドハウス）の統計資料による。社会職業分類の1901年～1946年はバール県古文書館所蔵のセヨンの住民名簿をもとにして筆者が分類集計。1962年～1975年は I. N. S. E. E. 資料による。セカンドハウス数は1946年の数値のみ CALMETTES (1967) により，それ以外のものは I. N. S. E. E. 資料による。

ことがわかる。[1] しかしこの時期セヨンは大きく形態的に変化することになる。十九世紀後半のナポレオニアンと呼ばれる地籍図（図5）と現在の地籍図（図6）を比較すれば、どのような変化が生じたかが視覚的にとらえられよう。[2] この二つの地籍図からは二つの変化が読み取れる。一つは集落の東の地区が消え、逆に西の地区が新しくできたこと、もう一つは洞穴（grotte）の消滅である。[3] この変化がどのようなものだったのか、なぜだったのかは以下のフロランスの記述が非常に参考になる。

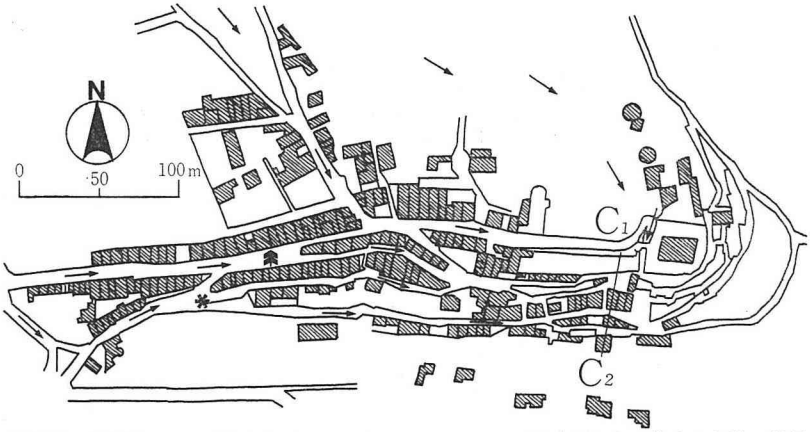
「セヨンはその当時（二十世紀初頭、筆者注）大きな変化、現在の生活に少しずつ近づいていくような深い変化の時代にあった。村はその位置を変え、人々はバルブランの古い地区を捨て、「新しい家々」に移ってきた。お館の下の凝灰岩に掘りこまれた古い家、唯一の開口部として小さな入口しかもっていない不健康な家、風と雨と寒さを防ぐ避難小屋でしかないような家は捨て去られていった。断崖



：建造物（原図では赤色着色、斜線は筆者記入）　：洞穴

（バール県古文書館所蔵の1:1000セヨン古地籍図の一部を縮小複写）

図5　19世紀後半のセヨンの村



：建造物　→：ミストラルの吹く向き　：夏に引退農民たちの集まる木陰の場所

✱：冬に引退農民たちのいる日当りの場所

（DRAGUIGNAN の地所税金局1:500セヨン地籍図(1986)をもとに現地調査の結果を含めて筆者作図）

図6　現在のセヨンの村

に掘られた湿気の多い地下倉は雨の多い冬には水がしみだしたが、寝室として使われていた。天井はとても低く、人々は座ることもできず、ベッドへ這って入った。狭い台所のとなりは居間であり、その一番大きな角には通気性の悪い暖炉があった。ただ南の方を向いた入り口の戸だけは、天気のいいときには日に照らされ、陰気な家のたった一つの喜びとなった。（中略）こんなふうに書くのは申し訳ないのだが、これが真実だった。セヨンは大変住み心地が悪く、幸せとは言えなかった。石工のブフが少しずつ丘の西の方へと建てていった「新しい家々」はたくさんの窓を太陽に向け、快活で明るい、いなかにふさわしいような現代的な家になっていった。ブフは初等教育しか受けていなかったが、自分の仕事に情熱を抱いていた。彼の設計は、制限された資金のことを考慮すれば、当時としては傑作ものであったろう。広くて風通しの良い通りをもつような今の村をつくったのは彼なんだと、私は礼を言おう。（中略）とにかく村は少しずつ西の方へと、空気と空間と暮らしやすさを求めて伸びていったのである。④」（下線は筆者のもの）

また洞穴の様子も「断崖に掘られた湿気の多い地下倉」という表現でフロランスの記述にも間接的に示されている。いずれにせよ筆者が下線を引いたように、フロランスは古く、狭く、じめじめした、不健康なセヨンと明るく、広々として、現代的で、健康的なセヨンとの対比を強調しているのである。

ところでバスプロバンス、コートダジュール地方に限らず、他の伝統的な居住形態に比して、意外に丘上集落の家屋構造、集落構造についての報告や実測図は多くない。⑤だが基本的な形態はすでに明らかにされており、⑥セヨンの家屋についても一九三〇年のある家屋の図（セヨン一九〇五～一九五五年の工事関係史料（二〇一二八―五）の中の一つ、ただし図の掲載は省略。）がバール県古文書館に残っている。それを見れば開口部の少なさと小ささが読みとれる。一方、現在の住民はセヨンの家屋の大きな形態変化の一つとして、しばしば窓が増えかつ拡げられた⑦ことを口にするが、これはフロランスの文章にも「たくさんの窓を太陽に向け」というように表現されている。

セヨンの最も古い地区、断崖に彫り込まれた洞穴、小さな窓の放棄は日常的な事実かもしれないが、丘上集落の伝統的な形態⑧が現代的な形態へと変化した重要な現象を示している。そして繰り返すが、この変化はフロランスが言うように、何をさておき不健康なセヨンから健康的なセヨンへの変化であったと意識されてい

ることを忘れてはならない。

さて、二十世紀初頭のバルブラン地区の放棄は丘上集落の衰退現象の一形態とも解釈できる。最も標高が高く、最も古い核の地区が捨てられた事実は大きい。にもかかわらず、筆者が本稿でセヨンの丘上集落の「ルネッサンス」とするのは、セヨンの住民も専門家も現在のセヨンの村が丘上にあると認識しているからである。[9] そしてフロランスも確かに一九六〇年頃のセヨンの村が丘上にあることを言い表している。[10] 結局、現在のセヨンの村に関しては、ミクロに見れば、中世のカストロムに直接の起源をもつ伝統的な地中海的集落形態のかなりの部分が失われている、ところがマクロに見れば、やはり丘上にあり続ける集落に変わりはなく、住民も専門家もそうした認識をもっているということである。このことはまさに丘上集落という語の使用上の曖昧さ、とくに拡大ぎみに使用される傾向と、その反対に極めて現代的な（ツーリズムや文化遺産が重視される時代という意味で）意味の強さ、人々の意識の中での明確な意味の存在を表していると言えよう。また別の言い方をすれば、丘上集落の語は多くの場合、本質的には厳密な、ミクロな集落形態を指すものではなく、一般レベルでの、あるいはマクロな景観を示す語であるということになるだろう。これは二十世紀の丘上集落の「ルネッサンス」を考える場合、重要なことではないだろうか。今日の丘上の集落には遠目に見える印象的な姿を除いては、厳密的な意味でかなりの伝統的な形態が失われている。しかしこのような事実とはほとんど無関係に地中海沿岸地方特有の景観として、多くの集落が丘上にあることが強調されるのは、[11] 現代社会のノスタルジアや地域アイデンティティー、あるいはフランスにおける美景の概念などの問題にまで議論を踏み込ませる必要があることを示しているのであろうが、本論の域を越えるのでこれ以上の議論は控えたい。

（2） 一九六〇年代以降の機能的変化

集落機能は定住人口の構成状況以上に、常時／臨時の居住家屋の利用形態に大きく左右されよう。とくに本稿のようなセカンドハウス（résidence secondaire）が多いと想像される集落では、定住人口の統計はあまり意味がない。またセカンドハウスの利用人口を明らかにするのは容易ではない以上、人口ではなく家屋の統計をみるのが適当と考えられる。今 I.N.S.E.E. では一つの家屋に住む人間の集まりを世帯と定義している。したがってこれによれば、世帯代表者の社会経済的属性別の世帯数と本宅（résidence principale）／セカンドハウス数の資料の直接比較が可能になる。つまりこの二つの別個の統計を複合して、使用目的別の

表3　セヨンへの人口流入

一回前の国勢調査時の居住地	1975年		1982年	
	人口(人)	比率(%)	人口(人)	比率(%)
セ　ヨ　ン	208	67	244	61
セヨン以外のバール県	34	11	32	8
上以外プロバンス・アルプ・コートダジュール	43	14	98	25
上以外フランスの地方	16	5	13	3
フランス本土外	8	3	10	3

1975年現在のセヨンの人口を1968年当時の居住地別に，
1982年現在の人口は1975年当時の居住地別に示したもの。
I. N. S. E. E. 資料による。

表4　セヨンの人々の就労地

就　労　地	1975年		1982年	
	人　数	比率(%)	人　数	比率(%)
セ　ヨ　ン	82	72	66	48
セヨン以外のバール県内	23	20	34	25
バール県外	9	8	36	27

I. N. S. E. E. 資料による。

家屋数の統計がつくれるのである。

一九六〇年代になってセヨンの居住家屋数は人口とともに減少から増加へ反転する。そしてこれ以降は、家屋数の増加とともに急激に家屋の利用形態をも変化させてくる(表2)。農業従事者家屋の減少と職人、小売、卸売商人を除く非農業従事者家屋の増加である。また退職者家屋の増加も顕著である。退職者は引退農民といわゆる第二次、第三次産業からの退職者に大きく分類されるが、聞き取りによれば、セヨンでは前者は地元引退農民、後者は都市からの流入者が多いようである。非農業従事者家屋の増加がコミュンヌ外からの流入によるものであることは表3からも分かる。また近年のセヨンの就業人口のうち、バール県外で就労する割合は増えており(表4)、セヨンが外部との関係を活発にしてきたことを示している。主な就労地は高次中心地のマルセイユ都市圏だという。また表2に戻るならば、一九六〇年代以降セカンドハウスは著しい増加を示すことが分かる。一九七五年で農業従事者の家屋は一四%にまで落ち込み、半分近くがセカンドハウス、そしてその他は退職者、引退農民と非農業従事者の家屋になっている。

セカンドハウスは主に都市居住者のバカンスや週末滞在用の臨時的な住居であるが、その社会的意味はフランスでは非常に大き

い。クリビエ(CRIBIER, F.)によれば、ヨーロッパ諸国の中でも居住環境の悪化しているフランスの都市居住者にとって、セカンドハウスは都市の住居の代用、補完の住居であり、また多くの人々にとっては、安い価格で都市にはない静けさや緑などの環境を手に入れることのできる唯一の手段であるという。[12] 事実フランスのセカンドハウスは大衆化しており、[13] とりわけ南フランスの人々のセカンドハウス保有率は高い。[14] またプロバンスやコートダジュール地方では、セカンドハウスは通常ふだんの居住地から一〇〇kmから一二〇km、自動車で一時間から二時間の距離までにあり、しかもその利用はバカンス型ではなく週末型が多くなっている。[15] もちろん週末の他に夏、クリスマス、復活祭などのバカンスにも利用され、年間かなりの日数にのぼる。[16] またセカンドハウスはそのまま退職後の住居となる傾向があり、[17] 一概に一時的な利用の住居とだけみなすわけにもいかないのである。

ところで、セヨンのセカンドハウス滞在者はマルセイユ都市圏からのものが多いことが、すでにプロバンス、コートダジュール地方のセカンドハウスに関する都市勢力圏の問題として明らかにされている。[18] したがって、これまでの事実とあわせて、マルセイユ都市圏勢力下における、セヨンのセカンドハウスを中心としたラーバニゼーション現象がはっきりと見てとれる。

以上は統計資料を中心にみてきたことだが、いくら集居率が高めとはいえ、前述したようにこれらの統計はセヨン全体の集計である。そこで現地調査から分かったセヨンの村の状況について簡単に付け加えたい。農業従事世帯は村内の狭さをきらって、孤立宅やアモに多く居住している。[19] ただ引退農民は村のとくに西の地区に多くみられる。彼らは冬は石でできた日の当たるテラス状の場所で、夏は人工の泉のある木陰のベンチでだんらんするのであるが、いずれもその場所は集落の西の地区である(図6参照)。一方、現在のセヨンの最も眺望のよく最も古い地区、つまり最も丘上集落的な景観をもつ通りの家屋は、聞き取りによれば、多くがスウェーデン人やデンマーク人のセカンドハウスである。しかし、これが空間的セグリゲーションと呼べるほどのものなのかは筆者の調査からだけでは不十分で確認できなかった。ただバカンス滞在地、訪問地として有名なコートデモール地方(Côte des Maures)の丘上集落など知名度の高い丘上集落のセカンドハウスがかなりの部分パリ大都市圏住民の勢力下にあり、その他の無名の集落がバスプロバンスやコートダジュールの市民の勢力下にあるという事実[20]とあい通ずるところがあるようで興味深い。

現在のセヨンの村は、かつてフロランスが記述したようなコミュンヌの完全な中心地機能を担っているとは思えない。確かに役

場、小学校、郵便局、教会は村にあるものの、商店は無いに等しく、定期市を除けば、日用品の購入はあまり期待できない。実際あるのはパン屋、カフェ、食料品店が各一店だけで、[21] 人々はふつう南へ五kmの中次中心地サンマクシマン・ラサントボム(Saint-Maximin-la-Sainte-Baume, 図2参照)や高次中心地マルセイユに買い物に行くのだそうである。また日曜日のミサも、村の教会には司祭がいないのでサンマクシマンからやって来るのだそうである。ところでセカンドハウスが多いと筆者は述べたが、セョンはエズ(Èze)やゴルド(Gordes)といったいわゆる観光丘上集落ではない。土産物屋はもちろんのこと、ホテル、レストランでさえ一軒も村にはないのである。[22] 以上のように、一九六〇年代以降の現代セョンの丘上集落はローカルなレベルのバカンス集落とも言えるが、より正確には居住機能に特化した集落と言うべきだろう。

① FLORENS, op. cit., pp. 122-126 はちゃちな小売商人や職人が村で活動している様子を描いており、彼らがセョンの人々にとって重要な財サービスの供給者であったことをうかがわせる。

② もちろん現在との比較ではいつが大きな変化だったかは分からないが、後述するように、フロランスの記述からそれは二十世紀初頭であった。これ以後は形態的には丘上集落に関する限りあまり変化はない。

③ 伝統的な形態として、丘上集落は岩質の斜面地に立地するため、岩の断崖を掘りこんでつくった空間、すなわち洞穴が多く見られる。洞穴は夏でも涼しく、セョンでもかつては、羊などの家畜を保管したり、馬の蹄鉄を作ったり、葡萄酒倉(cave)にしたり、あるいは冷えた葡萄酒を飲むカフェ(図9参照)にまでなっていたという。現在は残っているものは閉鎖されていたり、自動車の車庫用に改変されている。

④ FLORENS, op. cit., pp. 110-111.

⑤ 例えば BROMBERGER, Ch., LACROIX, J., RAULIN, H., —*L'architecture rurale française, Provence*, 1980 や RAYBAUT, P., PERRRÉARD, M., —*L'architecture rurale française, Comté de Nice*, 1982 などでも丘上集落の家屋に関する報告は非常に少ない。

⑥ BERGOUNHOUX, op. cit., pp. 94-97. /RAYMON, V., —《Les villages perchés d'Outre-Siagne, étude de leur structure, les maisons anciennes》, *Actes du 90e congrès national des sociétés savantes, section d'archéologie et histoire d'art, Nice*, 1965, pp. 139-155. /DÉMIANS D'ARCHIMBAUD, op. cit., pp. 65-255.

⑦ 窓の拡大については以下の文献にも指摘やイラストがある。TIRONE, 1971, op. cit., p. 657. /Univ. de Provence, op. cit., p. 212, p. 272.

⑧ 注⑥の文献は洞穴や小さな窓が丘上集落のいかに主要な伝統的特徴であるかを示している。

⑨ VALBONETTI, Robert, —*Saillons source d'Argens*, 1990, Ouvrage inédit, p. 3. /*Hachette Guide Bleu, Provence, Alpes, Côte d'Azur*, 1990, p. 281.

⑩ このことは次の表現から言えよう。「昼、青い空まで聳え(perché jusqu'au ciel bleu le jour)、夜、銀色の空まで聳え、光り輝く星屑の下、セョンは……(中略)食事のあとセョンに上りなさい。そこは美しいパノラマの広がる幸せな見晴らしの場所です。」(FLORENS, op. cit., pp. 141-142.)

⑪ *Hachette Guide Bleu* や *Guide Michelin Régional* などの旅行案内

書の中でも、丘上集落はしばしば地中海地方固有のツーリストアトラクションとして取り上げられている。

⑫ CRIBIER, Françoise, —《Les résidences secondaires des citadins dans les campagnes françaises》, *Études rurales*, n°49-50, 1973, p. 184.

⑬ CALMETTES, Mme., —《L'influence des résidences secondaires sur la vie des villages du Var》, *Cahiers du Tourisme*, série A, n°7, 1967, p. 1. /CRIBIER, op. cit., p. 187.

⑭ CRIBIER, op. cit., p. 189.

⑮ BARBIER, Bernard, —《Logements de vacances et résidences secondaires dans le sud-est méditerranéen》, *Cahiers du Tourisme*, série A, n°5, 1967, pp. 4-5.

⑯ CRIBIER, op. cit., p. 195 によれば、一九六〇年代で、セカンドハウスの年間平均使用日数はフランス全国で約六〇日、南フランスではこの値を優に上まわるという。

⑰ ibid., p. 195.

⑱ BARBIER, op. cit., pp. 5-8, p. 10.

⑲ この現象は非常に一般的である。例えば、Univ. de Provence, op. cit., p. 212, p. 214. /MARTINELLI, op. cit., pp. 38-39.

⑳ 以下の文献を参照。CALMETTES, op. cit., pp. 5-9. /BARBIER, op. cit., pp. 13-19. /Univ. de Provence, op. cit., p. 273.

㉑ ただしフランスでは、人口規模の小さな農村にとってこのように限られた中心機能しか存在しないことはごく一般的である。したがって現代においては、農村の居住者は外部の中心地へ買物に行くのが普通だと言ったほうがよいかもしれない。

㉒ セヨン唯一のホテルレストランがパリのアモにあるが、ここのホテルはセヨン訪問のためではなく、一三世紀のバジリカがあり、一年中観光客の絶えないサンマクシマンのための補助的な宿泊機能や通りすがりの自動車旅行者のための宿泊機能が中心だという。

《Ⅲ》 現在の丘上の場所

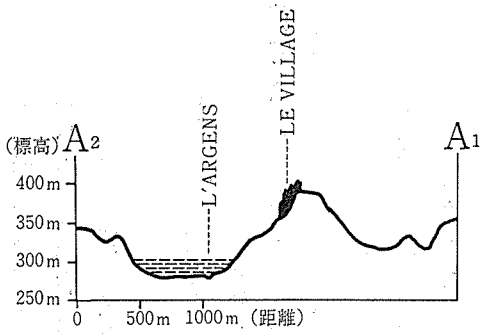
(1) 丘上の場所の質

本章では、セヨンの村のある丘上の場所や丘上集落の形態を家屋の構造まで含めて実地に観察し、また丘上の場所に対してセヨンの人々がどのように感じているかを明らかにする。まず、筆者

表5　丘上と低地の場所の質

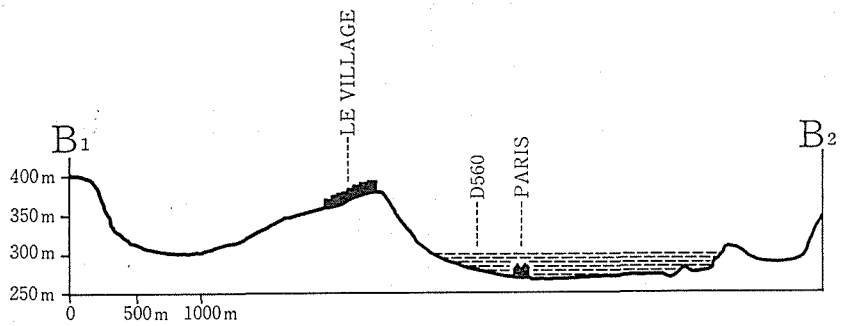
小丘南斜面上部 セヨンの村		盆地床／低地 サンマクシマンの町
寒さはゆるい 日当たりがよい ほとんど凍らない 日が長い	冬	とても寒い 日当たりが悪い しばしば凍る 日が短い
暑い 風通しよく涼しい	夏	暑い 風通しが悪く熱気溜まる
丘のまわりをまく 強く吹く 村の西では強い	ミストラル	強く吹く 風の通り道になる
乾燥している 霧がかからない	乾湿	じめじめしている とくに冬はよく霧が出る
静か 緑が多い 変化が少ない 空気がいい	その他	騒々しい 変化が多い

筆者の現地調査による。霧の分布については図7,8を参照。



▤：冬によく発生する霧
(I.G.N. 1:25000地形図をもとに現地調査の結果を含めて筆者作図)

図7　A_1—A_2（図4）断面



凡例，付記は図7と同じ　　図8　B_1—B_2（図4）断面

は「ここはいいところですか」①というような質問を都市からの退職者、セカンドハウス滞在者を中心にすることで、丘上の場所に対して彼らがもっている意識を探ろうとした。その結果、人々はとくに気候や気象に関するイメージを多く語り、局地風ミストラルに関するものを除いては、ほとんど共通の知覚と意識をもっていることが明らかになった。その内容の中心は表5に示すような、村の立地する丘の南斜面上部と盆地床／低地との対比である。この局地気候について、ひとことで言えば高燥と低湿の対比と言えよう。②とりわけ、人々は「太陽に照らされている」（"exposé au soleil"）という表現を頻繁に使い、村がよく日に当たっていることを指摘する。③こうした丘上の気候のよさは、ほぼリベの主張する点と一致している。④ただセヨンの村のあるような地形の場所の気候のよさは、ある程度局地気候の研究で明らかにされていることでもあり、⑤むしろここで注目すべきは、人々が

丘上の気候のよさは健康によいのだと説明する、その意識ではないだろうか。人々はしばしばセョンの丘上集落のあるような場所の質を、サンマクシマン、ときにはマルセイユの例までもちだし対比的に説明する。そして都市／町は健康に悪いが、村は農村的な環境があり、緑も多く、空気もきれいなのだと主張する。これを解釈すれば、セョンの丘上集落はただ単に丘上ゆえに健康的なだけでなく、農村的な環境でもあるから健康的なのだということになろう。

セョンの丘上集落に見られるのは農村的景観と都市に近い住民構成の結び付きである。現在の村は、環境的には農村空間の中に連続しているにもかかわらず、周囲のアモ、孤立宅、そして葡萄畑とは機能的に弱い結びつきしかもっていない。言い換えれば、農村空間に連続しているがゆえに農村的環境が保証されているのであるが、機能的には周囲の農村空間と断絶し、舗装された道路といくつかのコミュニケーション網によって、空間的には離れた都市と結び付いているということである。これが現代農村空間に出現した丘上集落の「ルネッサンス」の本質ではなかろうか。丘上の場所はトゥアン（TUAN, I.-F.）の言う野生でもない都市でもない、都市居住者にとってのトポフィリアとしての田園[6]と言えるだろう。そしてまた丘上集落の「ルネッサンス」はゲラン（GUÉRIN, J.-P.）／ギュミュシアン（GUMUCHIAN, H.）の「都市からの居住者にとって、いなか（campagne）は景観として見られる。[7]」やジョルジュ（GEORGE, P.）の「日常空間は都市空間となり、都市空間以外は環境となっている。[8]」といった指摘を思い起こさせるのである。

つぎに、知覚や意識が分かれたミストラルに関して、もう少し考察した結果を述べよう。ミストラルについての知覚、意識はおもに表5のように三パターンあるが、これを念頭において、筆者は現地で実際にミストラルの吹き抜け方を観察した。[9]図4に示すように、ミストラルは村のある小丘の北西斜面に当たったのち二方向に分かれる。この意味においては村を直撃することはない。しかし、分裂したミストラルの一方は西からまわりこんで村の通りに吹き込んでくる（図6）。とくに通りは狭く、また両側を三層ほどの連続する家屋にきっちりとおさえられているため、風速はかなりのものになる。ただし村の中でも東の方へいくにつれ風は弱まり、かつて最も古い地区として家屋のあった小丘の南東斜面上部ではほとんど風は感じられない。

ミストラルの表れ方は同じ集落内でもいろいろなので、前述のミストラルに対する知覚の多様性はミクロな居住場所に一部分よるとも考えられるが、筆者の調査からは確かなことは言えなかっ

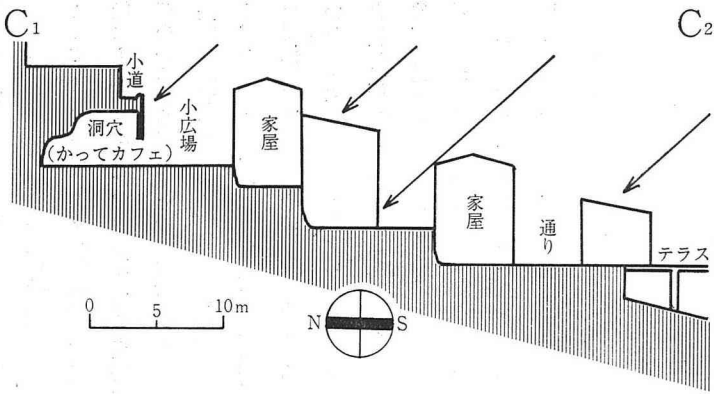
た。はっきりしているのは、ミストラルに関する意識は一つには定まらないということだけである。[10] それでは、いかにしても人々のミストラルに対する評価の多様性は説明されないのであろうか。ここで今までのミストラル関係の研究史を振り返ってみよう。一般にミストラルには、その冷たさや災害をもたらす、あるいは神経をいらいらさせるといった否定的なイメージがあるが、[11] 本当は長短両所があるという。ミストラルが気象に与える影響力は大きく、冬には晴天、比較的低い湿度、低い気温、夏には晴天、極めて低い湿度、さわやかな気温をもたらすことが明らかになっている。[12] また、10m/s 以上の強いミストラルは冬、そしてとくに春に頻発するが、5m/s 以上のミストラルで見た場合、冬、春の他、夏にも同じように発生するという調査結果が出されており、[13] 夏のミストラルは少しばかり夏の日中を涼しくするのである。[14]

以上の事実はミストラルの人間生活に対する作用の多様性を示しているのであるが、これをもとに改めてセヨンの丘上集落におけるミストラルを解釈すると次のようになろう。セヨン付近ではミストラルは丘上集落を直撃こそしないが、かなりの速さで集落の通りを吹き抜ける。そのときミストラルは風通しの効果と夏の涼しさに貢献する。なお、冬のミストラルについては、その強さはローヌ河谷やマルセイユなどに比してかなり小さいものであること、[15] またミストラルは集落の通りを吹き抜けるのであって、家屋を直撃するのではないことを記しておく。結局ミストラルは丘上ではそれほど強くはないか、または吹いてくるとしても、夏などはむしろ涼しさをもたらすという肯定的なイメージが少なくないということである。

最後にフロランスの記述をみよう。彼はミストラルについて、つぎのように書き残している。「一九六〇年になるまで、下水道の整備ができていなかったので、通りには糞便の臭いがただよっていたが、その悪臭をわずかでも薄めてくれたのはミストラルだけであった。[16]」これは、前述したようなフロランスの二十世紀初頭の変化に関する記述とあわせて、ミストラルに対する彼のイメージが語られていて興味深い。

（2） 集落と家屋の構造

今まで述べてきた丘上の場所のもつ気候のよさは集落や家屋の形態にも最大限利用されている。集落レベルでは、丘上集落は図7、図8や図9の断面図に見られるように、小丘の斜度一五度から二〇度の南斜面に家屋をくいつかせるように、三段から五段の階段状に並ばせており、日当たりのよさが容易に想像できる。[17] また筆者の観察によれば、集落の東の地区では家屋は比較的高層で、



⟶：春分の午前10時頃の太陽光線の差し込み方（筆者の現地でのスケッチによる）

図9　C_1—C_2（図6）断面

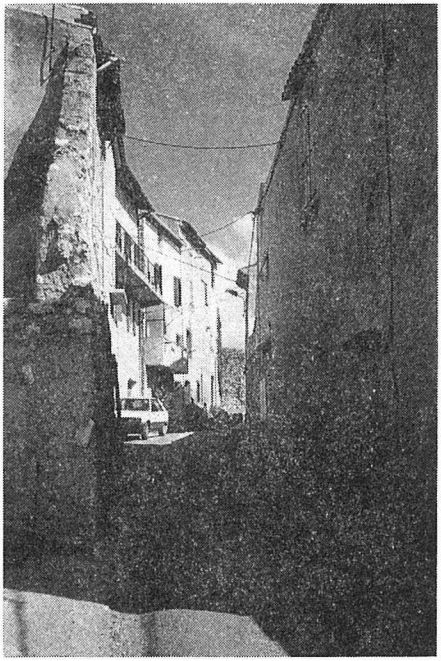


図10　村の東の方の通り（筆者の写真）
右手が南。丘上集落には自動車の通行不可能なものもあるが，セヨンでは，この写真のように自動車は十分入れるので不便がない。

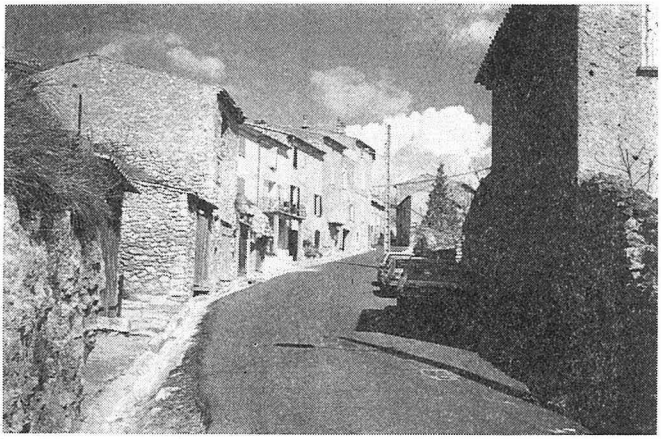


図11　村の西の方の通り（筆者の写真）
右手が南。この写真からは丘上集落とは思えないくらいすき間の多い空間となっている。

通りは狭いが、斜面の角度は急であり、集落の西の地区では斜面は緩いが、家屋は低く、通りは広いので日当たりのよさは似たようなものになっている（図10、11参照）。

個々の家屋レベルについて見るならば、日当たりのよさは集落形態と集落立地場所の構造的なものだけでなく、家屋内の間取りにも見られる。いくつかの家屋を調査したところ、一般的なモデルは他の丘上集落と違わず、下層階から上層階へ、葡萄酒倉、台所、居間、寝室、屋根裏部屋と変わっていくパターンと、住居の南面には居間、寝室や窓が多くあり、北面は葡萄酒倉、台所や戸口になっているというパターンの二つであった[18]。これらのパターンは農村時代の形態を色濃く残しているが、すでに述べたように、窓の拡大、洞穴の放棄、そして農業機能の衰退による関連設備の放棄などの改変が見られる。

（3）丘上集落の「ルネッサンス」の意味

現在の住民に聞いても、丘上集落には生活上何の不便もないと言う。それは水と電気と自動車があるからだと言う。丘上集落の水問題については古くから貯水槽が整備され、水不足はそれほど深刻ではなかったとする説[19]もあるが、やはり低地に比べ水の確保は大問題で、フロランスも「一九一〇年にはじめて人工の泉に水

がひかれ、その後一九五六年になってアルジャン（Argens）川の水が丘の上の貯水タンクにまでくみ上げられ、その結果セヨンの人々は千年来の水の問題を解決した。[20]」と書いている。彼は同時に一九一〇年の電気の導入、一九二九年の歩道の設置、一九五六年の通りのアスファルト舗装、一九六〇年の下水道整備を記し、一九六〇年に至って、セヨンの家は水道、暖房、電気、テレビ、ラジオ、洗濯機を備えて、都市と同じ快適さをもつ家になったと述べている。[21] フロランスの記述はセヨンがいかに現代的になったかを、そしていかに都市に近づいたかを強調しており、それはセヨンがラーバニゼーション現象を示すほんの少し前であった一九六〇年という時期の人々の一般的な意識であったかもしれない。今日セヨンに居住、滞在する都市からの人々が都市との対比性を強調するのとは正反対である。

しかし、セヨンにおける丘上というハードな地形上の特異点が現代的な意味をもつ場所に変換しえたことの説明を考えるならば、これらはある一つの視点でとらえられるだろう。つまりフランスの一般の人々が他のものに比して、とりわけ自らの健康の確保を重要視するようになった現代、また健康的なイメージをもつ空間に対する指向性が強まった現代という時代の存在である。文化比較の点から考えれば、フランスをはじめヨーロッパにおいては、日本では考えられないほど健康への関心が高い。ちょうど日本が衛生の問題に必要以上に敏感なように、ヨーロッパ人は悲愴なくらい寒空の下でも日光浴に精を出し、週末の森や近隣の散歩を絶やさず、健康の確保に努める。そして彼らは太陽や新鮮な空気（air pur, bon air）こそが健康をもたらすという強い考え方をもっている。したがって、近代以来そこに居住するものにとって否定的にとらえられてきた丘上が、現代において保持されたのは、気候的な好条件をもつ地形的特異点が現代の人々の指向するような健康を保証する居住環境イメージと合致したこと、それと同時にミクロなレベルで集落形態の改良があり、かつ自動車の発達などによって、もはや丘上の場所は狭い不便な場所ではなくなったこと、さらにセヨンの村が農村空間の中に連続して存在し、現代都市居住者から都市と対比される好ましいイメージを与えられるようになったことがあるからだと指摘できる。より模式的に言えば、セヨンの丘上集落の「ルネッサンス」は時間軸上は、過去の伝統的、閉鎖的形態のセヨンと今日の現代的、開放的形態のセヨンとの対比、垂直軸上は、丘上という気候のよい場所と低地や盆地床の寒く湿気の多い場所との対比、そして水平軸上は、農村的、田園的なセヨンと環境の悪い都市との対比という三つの軸、つまり健康イメージを評価基準にしたこの三つの軸の上に位置づけら

れると言えるだろう。

ただ、丘上集落に結びつく健康イメージは象徴的な一面をもっていることをも考えねばならない。事実ブザンスノ(BESANCENOT, J.-P.)は地中海地方と老齢者の健康の関係を厳密に分析し、個々の事例では変わるものの、一般的には老齢者が健康の確保のために地中海沿岸地方の気候にいだく魅力的なイメージは科学的には疑わしいと結論し、むしろ心理的な効果のほうを重要視し、地中海地方の天気が老後生活の楽しみとその生活の質を向上させるのではないかと述べている。[22] また地中海地方では、本来は夏の暑さを部屋の中に入れないため開口部は小さいほうがよいと言われる。[23] ラポポート(RAPOPORT, A.)の言うように、現代でも住居はシンボル的な要素をもちうるのである。[24]

① 例えば"On est bien ici?"などと聞き始めた。

② このことについて村の引退農民やサンマクシマンやパリのアモといった盆地の縁や盆地床の住民に聞いても同じ結果であった。

③ これは以下の文献が指摘するような、バカンスにおける太陽の存在の重要性とも関連しよう。LAURENT, Alain,—《Le thème du soleil dans la publicité des organismes de vacances》, *Communications* (Paris), n°10, 1967, pp. 35-50. /BESANCENOT, Jean-Pierre, —*Climat et tourisme*, Masson, 1990, pp. 29-32.

④ LIVET, 1962, op. cit., pp. 37-54, pp. 210-212.

⑤ ESCOURROU, Gisèle, —*Climat et environnement, les facteurs locaux du climat*, Masson, 1981, pp. 66-76.

⑥ TUAN, Yi-Fu, —*Topophilia, a study of environmental perception, attitudes and values*, Prentice Hall, 1974, pp. 102-112.

⑦ GUÉRIN, Jean-Paul, GUMUCHIAN, Hervé, —《Ruraux et ruïbains, réflexions sur les fondements de la ruralité d'aujourd'hui》, *Revue de Géographie Alpine*, tome 67, 1979, p. 100.

⑧ GEORGE, Pierre, —《Cinquante ans qui ont transformé les rapports avec l'espace》, *Communications* (Paris), n°41, 1985, p. 163.

⑨ "ミストラルはバール県西部では一年間、ほぼ決まって西北西の方向から吹き(BÉNÉVENT, Ernest,—《Sur la direction et la fréquence du mistral en Basse-Provence et sur les causes de ce courant aérien》, *Bulletin de la section de géographie*, tome 53, 71° congrès des sociétés savantes, Nice, 1983, p. 20. /ORIEUX, Adrien, POUGET, Émile, —*Le mistral*, monographie n°5 de la direction de la météorologie, 1984, p. 2.) しかもプロバンスは地形に凹凸が多く風の通り道が一定に決められやすいので観察は容易である。

⑩ WYLIE, Laurence, —*Village in the Vaucluse: account of life in a French village*, Harvard U.P., 1957, p. 186 もミストラルの人々に与える影響の二面性を述べている。

⑪ BÉNÉVENT, Ernest, —《Bora et Mistral》, *Annales de Géographie*, 39° année, n°211, 1930, pp. 288-289. またWYLIE, op. cit., p. 4 もミストラルの厳しさを記述している。

⑫ ORIEUX, POUGET, op. cit., p. 1. /AUDURIER-CROS, A., IZARD, J.-L., —《Types de temps en climat méditerranéen et conception architecturale bioclimatique》, *Méditerranée*, n°4, 1980, p. 70. /BESANCENOT, Jean-Pierre,—《Vents et santé en façade

méditerranéenne de l'Europe》, *Annales de Géographie*, n°546, 1989, pp. 180-182.

⑬ ORIEUX, POUGET, op. cit., pp. 3-5.

⑭ ASCENCIO, Ernest, —*Aspects climatologiques des départements de la région Provence, Alpes, Côte d'Azur*, monographie n°2 de la direction de la météorologie, 1983, p. 68.

⑮ BÉNÉVENT, 1938, op. cit., pp. 19-20. / ORIEUX, POUGET, op. cit., pp. 2-3.

⑯ FLORENS, op. cit., p. 111.

⑰ HUFTY, A., DAVY, L., THERIAULT, M., CANCIGH, O., —《Le rayonnement solaire dans la région de Montpellier》, *Méditerranée*, n°3, 1986, pp. 43-59 の研究は南仏モンペリエ地方の傾斜面地を事例に、斜面の向き、角度によってどのように太陽の放射エネルギー受容量が変化するかを理論上で算出しているが、それによれば、南向き三〇度斜面が最もエネルギー受容量が多く、次いで南向き二〇度斜面と南東（南西）三〇度斜面がほぼ同量で続き、以下南東（南西）二〇度斜面、さらに南一〇度斜面となる。

⑱ このような家屋は地理学などでmaison en hauteur と呼ばれる。

⑲ LIVET, Roger, —《Problemes provençaux : l'eau et les villages》, *Bulletin de la société de géographie de Marseille*, mars, 1954, pp. 33-38.

⑳ FLORENS, op. cit., p. 55.

㉑ ibid., p. 58, p. 139, p. 141.

㉒ BESANCENOT, Jean-Pierre, —《Mediterranean climate and geriatrics》, *Experientia*, tome 43, n°1, 1987, pp. 58-62.

㉓ GEORGE, 1930, op. cit., p. 591. /GIVON, B., —*L'homme, l'architecture et le climat*, C.E.P., 1978, pp. 365-367.

㉔ アモス・ラポポート、『住まいと文化』、山本正三他訳、大明堂、一九八七、一九二頁。

おわりに

一般的に言って、現代南仏バスプロバンスの丘上集落の「ルネッサンス」には農業人口の流出による空き家の発生、この安価な家屋に目をつけた不動産業者の存在、農民による収入目的の家屋や土地の売却、バカンスの大衆化と拡がり、ライフサイクルの変化による老後生活の重要性の高まり、老後における都市からの帰郷現象などのさまざまな社会的経済的要因が大きく存在する。が、そうした流れの中で、筆者は積極的に集落の立地する場所や集落内部のミクロな部分、さらに、そこに居住あるいは滞在する人々の知覚や意識の問題にまで踏み込みながら、現代において丘上という地形上の無機的な特異点が社会文化的に意味をもつ場所に変換した事実①とそのプロセスの説明をセョンの丘上集落を例に試みた。そこでは、丘上の場所がもつ好条件の気候などの地形的特異点固有の質と現代の都市居住者が追求する健康的な空間イメージの重なりの存在が、セョンの丘上集落を新たな意味のある場所へと変化させたということが明らかにできた。

ところで近年ツーリズム、気候などの環境、健康の関係につい

ての重厚な研究が出ている。[2] 本稿も結果的にこうした問題についての議論を試みたことになったが、ツーリズムやバカンスを考える場合、環境や健康意識の問題は多くの重要な視点を含んでいると言えるだろう。

① 本稿では単なる地形上の特異点としての site が何らかの意味の場所（lieu de ……）になったと説明してきたが、ここで一つ注意しておきたいのは、site の意味と lieu の意味である。site は都市の最初の立地場所、工場などの経済立地、自然景観や地形における変換点、考古学の発掘地点やツーリズムの対象、歴史的な出来事の場所などの特殊な地点、その他行政上保護されるべき景観の意味で使われる。このように site が空間的と同時に形態的な特徴を示すのに対し、lieu は具体的であれ抽象的であれ、純粋に場所を示す語で、特別に修飾（例えば宗教的歴史的なシンボルの場所としての haut lieu）や説明（例えば休息、安らぎの場である lieu de repos）がなされないかぎり、あるいは、人文主義的地理学の枠組でもないかぎり、空間上の一点にすぎない。したがってむしろ単なる lieu がある出来事によって歴史的文化的な意味のある site になっていくことも多いことを付け加えておきたい。

② CHADEFAUD, Michel, —*Aux origines du tourisme dans les pays de l'Adour*, Thèse de doctorat d'État, Infocompo, 1988, pp. 31–131. ／ アラン・コルバン、『浜辺の誕生——海と人間の系譜学』、福井和美訳、藤原書店、一九九二、一三三頁～二〇四頁など。

《付記》 本稿の概要は、一九九二年秋に大阪大学で行われた人文地理学会大会で発表しました。またとくに、筆者のいろいろな質問に答えて下さったフランス・オルレアンのDRAEのドゥニ・マリ・ラエレック氏にこの場を借りてお礼申し上げます。

（京都大学大学院生、日本学術振興会特別研究員）